コロナ禍が今後の学校教育に与える影響

The Impact of the Corona (COVID-19) Related Crisis on the Future of School Education

木更津工業高等専門学校 大 枝 真 一
Shinichi OEDA

新型コロナウイルス感染症が全世界で猛威を振っている。国内でも感染者数が増加し、これまでの当たり前だった生活が当たり前ではなくなった。感染予防対策のために「新しい生活様式」を実践していかなければならなくなったからである。これは多方面で影響を及ぼしているが、ここでは学校教育への影響を取り上げたいと思う。

新しい生活様式では、例えば、人との間隔を2mあける、屋内では多人数で集まらない、会話をなるべく避ける等が求められている。つまり学校教育の現場は、「3密」(密集、密接、密閉)の条件を満たしているため対面授業を実施することができず、多くの大学や高専では遠隔授業を行っている。

学生は学校で学ぶ機会を失ってしまった。しかし、教員は対面授業に劣ることがないように、培ってきた豊富な経験と創意工夫により、膨大な時間をかけて遠隔授業に臨んでいる。私自身、毎日必死に遠隔授業の準備を行っている。当初、遠隔授業は普通の授業の延長線上にあると考えていた。しかし、対面授業と遠隔授業の違いは、想像を遥かに超えていた。

対面授業では学生が目の前にいて黒板を使うことができたが、遠隔授業では学生の様子が見えない上に黒板を使うことができない。私の遠隔授業では事前に教える内容の資料を作成し、音声を読み込む。遠隔授業が開始すると学生は各自で音声を聞きながら資料を読み、課題に取り組む。遠隔授業中は学生が目の前にいないため、現

在進行系で受講しているはずの学生達の理解度が全くわからない。遠隔授業で初めて気づいたのだが、これまでの対面授業では学生の微妙な反応を捉え、学生の何割がわかっているのかおおよそ把握できていた。おそらく私だけでなく教員の持つ特殊能力なのだと思う。そして理解が十分でない場合、対面授業では臨機応変に黒板を使って説明できたが、残念ながら遠隔授業ではできない。

逆に遠隔授業で良かった点もある。それはオンデマンド型の授業教材の充実である。対面授業が当たり前だったときには、多大な労力がかかるオンデマンド型の授業教材を作ることは考えられなかった。しかし、コロナ禍によって、多くの大学や高専で多種多様なコンテンツとレベルの教材が全国で一斉に作成される事態となった。来年度以降、対面授業が再開されても、今まさに作成している遠隔授業の教材を学生に提示すれば、学生は効果的な予習・復習ができるだろう。また、どの大学や高専でも開講している同様科目は、全国からの選りすぐりの遠隔授業教材を共通で用いることで高い教育効果を期待できる可能性もある。こうなったとき、各教員の独創性をどのように授業に組み込むのか、対面授業の存在価値はどこにあるのか、また遠隔授業で良いなら学校そのものの独自性を打ち出せるのか真剣に考える必要がある。コロナ禍によって、「新しい生活様式」のみならず「新しい学校教育様式」を模索しなければならなくなったと私は思う。

ご存知ですか？

「工学教育」の前身誌「工業教育」創刊号から
論文や論説が Web で簡単に！！

科学技術振興機構 (JST) の行う Journal@rchive が J-stage と統合され使いやすくなりました。1953 年の創刊号から、どなたでも閲覧が可能です。日工教のホームページ (<https://www.jsee.or.jp/>) からどうぞ！

◀ 「新制大学における工業教育」内田俊一 (東京工業大学長)
「工業教育」第 1 巻 1 号 p.1 (1953)